馬　耳　東　風

今年の前半は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する情報に揉まれて瞬く間に過ぎた感がある．緊急事態宣言が5月25日全面的に解除され，国内での1日の感染者数が50人以下で推移した時は，流行は終息に向かうと思われたが，7月に入り首都圏を中心に再流行の兆しが現れ，予断を許さない事態になっている．以前から，疫学的にみて急性感染症は，集団の7割以上が免疫を獲得すれば流行は終息すると言われているが，全国的にこの状態になるまでにはまだ道のりは遠い．国民には流行終息以降，新しい生活様式への意識の転換が必要と喧伝されているが，社会の転換期には社会が抱えるさまざまな歪みが表面化すると言われている．日本の中枢における不正，不平等，虚偽などに対する不満が蓄積している現在，COVID-19の感染拡大が，信頼される政府へと大きく方向転換する契機となってほしいものだ．

わが国では感染拡大防止のため外出自粛等かなり厳しい規制が執られた訳だが，この間，最も大きな影響を受けたのは3月2日から約3カ月間の臨時休校となった学齢期の子どもの居る家庭ではなかろうか．休校実施に伴い，生活，労働・雇用，介護・福祉など，さまざまな分野に影響が波及した．外出自粛に因り町中から子ども達の姿は消え，楽しそうに喋る声も，生活の息吹も消えた．生徒・学生達をはじめ家庭に閉じ込められた多くの人々はこの間どの様に過ごしたのだろうか．聞こえてくるのはTVとかスマホを見ている時間が非常に長くなったという声である．以前から指摘されていることだが，スマホに費やす時間と学力の間に反比例の関係があると言われている．親の領分を侵しても孫たちにはTVもスマホも，無制限に見ないように戒めてしまった．インターネット，スマホなど現在の情報機器は使用法によっては非常に便利であり，今の世の中，スマホ無しでは生活できないと言う人が多い．一方でその便利さに慣らされスマホ脳になるとそれから脱却する事は非常に難しいと言われており，スマホも薬物，アルコールと同様に依存症として病気の範疇に入れられた．スマホ依存症ではさらにスマホ老眼など身体の生理機能に影響が及ぶことから特に子どもに対する影響に警鐘が鳴らされている．以前，国立病院機構久里浜医療センター院長の樋口　進氏が「スマホ依存症の患者の中には脳が萎縮し，理性を司る機能が低下している者がいる」と述べていた．時間を掛けて前頭葉を使い，苦労して学習した事ほど強い記憶として残るが，スマホで検索して得た情報は強くは記憶されないであろう．

安岡正篤は著書の中で，人間を創るために必要な知識，見識，胆識を修得するためには，万巻の書を読み，深慮遠謀の習慣を積まなければならないと読書の重要性を述べている．情報機器のない頃の考えとは言え，今にも通用する学習の本質を述べていると思われる．建築家の安藤忠雄氏は「偏差値重視の今の教育では物事を大局的視野で判断できる人材は育たない．子ども達には知識を養い，自分で判断できる能力を身につけて欲しい．そのためにはじっくり本を読める環境を整えることが必要である」という，同感である．安藤氏はその思いを具現するため大阪に「こども本の森　中之島」を建設し，今月（7月）開館した．社会を担っている世代がスマホ依存症になっては，将来を託す子ども達を育む責任を果たすことは出来ない．

（青）